

厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)
心身症、神経症等の実態把握及び対策に関する研究
分担研究報告書

学習障害における病態解明と実態調査に関する研究(分担研究者 小枝達也)

学習障害が疑われる児童に対する通級指導の実態 - 仙台市 -
研究協力者 細川 徹 東北大学教育学部 教授

研究要旨

言語障害通級指導教室をもつ仙台市の12小学校を対象に、学習障害(LD)が疑われる通級児童に関する実態調査を行なった。調査は郵送法と面接法で行なわれ、対象となった12校すべてから協力が得られた。全通級児童165名のうち、LDまたはLDの可能性のある児童(以下LD児とする)は21名(12.7%)で、男女比は4:1、2~3年生が2/3を占めた。一方、他機関等でLDと診断(判定)されていた児童は5名(24%)にとどまった。LD児を心理・行動面から評定した結果を因子分析し、4因子(読み書き、計算・注意、見当識・音声言語、運動・行動)を抽出した。因子得点をもとにLD児を分類すると、3つの群に分かれ、それぞれ特徴的な教科学習習得状況のプロフィールを示した。

共同研究者

黄 淵熙

東北大学教育学研究科博士課程

阿部芳久

東北福祉大学社会福祉学部 教授

月下旬から2月初めにかけて質問紙の回収と通級指導教室担当教師への面接を行なった(ただし、1校では質問紙の回収のみ)。

質問は言語障害通級指導教室の実態、LD及びその可能性のある児童に対する指導方法とその効果や(以上、本票)児童の心理・行動面の特性と教科学習の習得状況など(個人票)からなるが、ここでは主に個人票の結果について報告する。

見出し語：心身症、実態調査、発生頻度、学習障害

A. 研究目的

わが国では学習障害(LD)児の実態は未だ明らかにされておらず、LD児の教育も制度化されていない。そのような中で、1993年以後、言語障害通級指導教室(ことばの教室)において、主に言語面からLD児に対する指導が行なわれるようになった。

本研究は、仙台市における言語障害通級指導教室の設置状況、通級対象児童に占めるLD児の割合、さらにどのようなLD児が存在するのかなどについて、基礎的資料を得ることを目的とする。

B. 研究方法

仙台市立小学校120校のうち言語障害通級指導教室をもつ12校を対象として、1998年12月に質問紙(本票と個人票)を郵送し、調査への協力を依頼した。その結果、12校すべてから協力が得られ、1999年1

C. 研究結果

1. 言語障害通級指導教室の概要

通級教室は1教室が7校、2教室が5校、自校通級児童は平均6.6名(2~12名、計79名)他校通級児童は平均7.2名(1~14名、計86名)で、そのうちLD児またはLDの可能性のある児童(以下、LD児とする)は165名中21名(12.7%)であった。この数は仙台市立小学校の全児童数(約6万5千人)の0.03%にあたる。また、通級担当教師の通算勤務年数は 17.6 ± 7.7 年で、通級担当となってからは 3.3 ± 2.5 年であった。

2. LD児の学年、性別、診断(判定)の有無

LD児はすべての学年にまたがるが、その中でも2年生(9名)と3年生(5名)が多く、他の学年は1

～2名であった。性別では男児が17名(81%)で女児が4名であった。また、LDと診断ないし判定されていた児童は5名(24%)で、その場所は児童相談所が最も多く(4名)、他は教育センターや病院が各1名であった(重複あり)。診断(判定)がなされていない場合、教師は心理検査(WISC, K-ABC, ITPA, PRSなど)や行動観察などからLDの可能性ありと判断していた。

3. LD児の特性(心理・行動)とその因子分析

聞いて理解する力、話す力、読む力、文字や文を書く力、計算する力、推論する力、場所や時間を判断する力、注意を集中する力、自分の行動を統制する力、仲間と協調する力、手先を器用に使うことの11項目について、3段階評定(劣っている、普通、優れている)を求め、完全回答が得られた19名を対象に因子分析(主成分分析+Promax回転)を行なった(各項目の平均値は、いずれも「普通」と「劣っている」の間であった)。その結果、4因子が抽出され(累積寄与率76%)、第1因子は読むと書く、第2因子は計算と注意、第3因子は場所や時間の判断、聞いて理解する・話す力と仲間との協調、第4因子は推論、不器用さと行動統制に高い因子負荷が認められた。

4. クラスタ分析によるLD児の分類

上記の結果得られた因子得点をもとに階層的クラスタ分析を行ない、LD児の分類を試みた。ここでは3分類(A群11名、B群5名、C群3名)の結果を報告する。

3群は学年、性別、通級期間、週あたりの指導時間には有意差が無かったが、C群は学年が一番若く、全員男児で、LDと診断(判定)されている者はいないなどの特徴があった。

3群の特性プロフィールを比較すると(図1)行動統制と器用さに1%水準で有意な群間差があり、聞く、場所時間の判断注意、仲間との協調にそれぞれ5%水準で有意な群間差があった。

A群は、聞く、注意、行動統制、仲間との協調が相対的に低いものの全般に劣る項目が多く、B群は計算の力があり器用だが、話す力や推論、行動統制に難点があり、C群は逆に、文字言語の操作と器用さに難点があるほかは良好であった。

教科学習の習得状況では(図2)A群は全般的に1学年程度の遅れがあり、B群は全般的に学年相当であり、C群は社会や生活が学年相当、国語、算数、図工が1学年の遅れ、体育が2学年の遅れを示していた。なお、算数と体育には5%水準で有意な群間差があった。

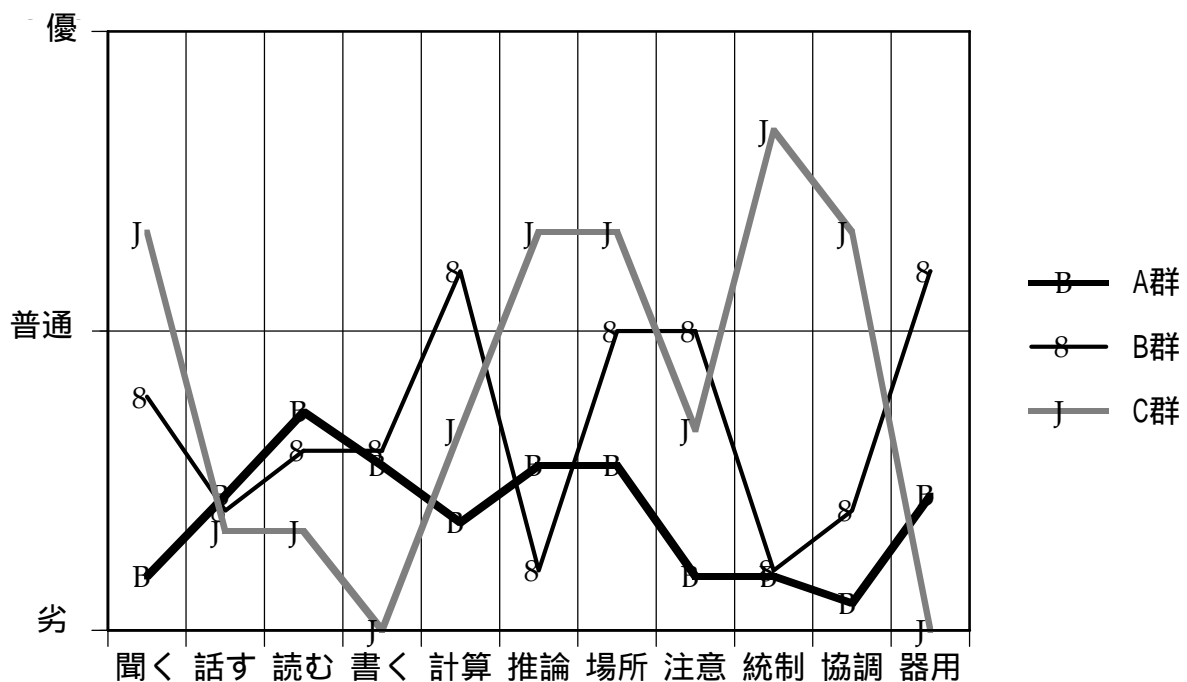


図1. LD児の特性プロフィール

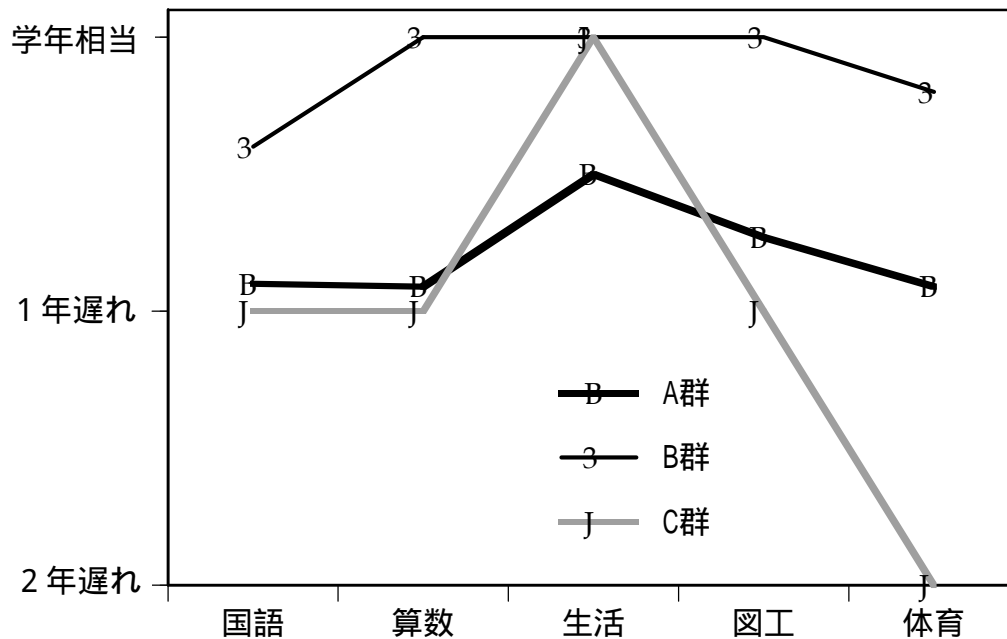


図2。LD児の教科学習の習得状況

D. 考察

仙台市の言語障害通級指導教室において、通級指導の対象となっているLD児はわずか21名であり、仙台市の全小学校児童のおよそ0.03%に過ぎないことがわかった。仙台市では、同教室以外、LD児に対する特別な指導の場がないことから、多くのLD児は十分な教育的対応受けずにいることが推測される。

また、言語障害を主訴とすることが通級指導の前提であり、必然的に言語性LD児が多いと予想されたが、心理機能や行動面の評定の特徴から、少なくとも3群の異質なLD児が存在することが示唆された。

ただし、今回の因子分析やクラスター分析は少ないN数に基づくものなので、今後、調査の範囲を拡大し、更に分析を深める必要がある。

E. 結論

仙台市の言語障害通級指導教室に通うLD(疑いのある)児は21名で、心理行動面の特徴から3つの異質な群に分類された。